

関東支部報告

色の起源を訪ねる --- ラスコー洞窟壁画視察ツアー

市原恭代(工学院大学)・福本麻子(慶應義塾大学)

クロマニヨン人の洞窟壁画の色彩
ー人類にとって色とは何かー

現在、生存している私たち現世人類(ホモサピエンス)は皆、約4万年前に欧州で生まれたとされるクロマニヨン人(Cro-Magnon)の子孫である。

Cro-Magnonはフランスの地名でフランス中南部に位置している。ラスコー洞窟を始めとする2000を超えるクロマニヨン人の遺跡の残る洞窟があり、壁画のある洞窟も数知れない。

2008年3月5日、私たちは日本色彩学会関東支部から派遣される形で、この洞窟壁画を探訪し測色する機会を得た。現地で迎えてくださったのは、小笠原文L'homme 夫妻、夫人の文さんは2000年色彩学会がランクロ先生を迎えて講演会を行った際、通訳をしてくださった方なので覚えていらっしゃる方も多いと思う。彼女はエコール・デ・ボザール(国立パリ美術大学)の彫刻科を出て現代芸術家として在仏で活躍しており、夫君のL'homme(ロム、人間という意味。考古学の技術者・研究者)と2004年に結婚した。

今回、このロム夫妻が骨折てくださり、決して普通の研究者では見ることでできない貴重な洞窟内部を拝見し、色材となった岩や土を実際に測色させて頂いた。また、ラスコー洞窟壁画の世界的権威であ

る国立先史博物館のノベール・オジョラ博士に直接講演して頂きお話を伺う機会を得た。さらに現在、最新のレーザー計測でラスコー洞窟の修復復元を行っているスタジオZKを見学し修復士サンソン氏に話を伺うなど本当に貴重な体験をさせて頂いた。労を惜しまず動いてくださったロム夫妻には厚く感謝したい。

さて、ネアンデルタール人は約20万年前に出現し、2万数1千年前に絶滅したとされている。対してクロマニヨン人は約4万年前に出現し、1万7千～8千年前には素晴らしい洞窟壁画を残し、現代の私たち人類へと続いている。クロマニヨン人とネアンデルタール人を比べると脳容積ではむしろ絶滅してしまったネアンデルタール人の方が大きい。ネアンデルタール人は石器を使い、火を用い、埋葬をしてそこから大量の花粉が発見されるという優れた文化の持ち主であった。しかし、彼らの文化はそれ以上には発達せず滅びてしまったのである。クロマニヨン人の最大の特徴はそのコミュニケーションにあるとされる。彼らは言葉を持ち、絵を描き、図記号を描いて、仲間に知り得たことを伝えることができた。

今回、そのたいへんな量の壁画や古代彫刻のうちほんの一部を視察した。(それでも3000以上のも線描画を見ている)そこには、ウマの浮き彫りあり、重なったイノシシ、シカ、マンモス、ヒト、おそらく意味があったであろう幾何学図形、線描、彫刻、着



クロマニヨンの洞窟がある岩壁



右からロム夫妻 後藤妥子さん 市原恭代 福本麻子さん

彩・・・本当にクロマニヨン人は私たちと同じく、素晴らしい芸術家であり、観察力鋭い科学者であったことがわかる。

それぞれの洞窟はキャップブランでは白いウマの彫刻的な浮き彫り、コンバレルでは何千個かの絵画練習の跡かと思われる線描画、ラスコーやフォンドゴウムでは彩色壁画と多様性に満ちている。おのおの洞窟の壁の質感や起伏を生かして、動物や物体の形にしており、中にはこれは自然がたまたまそのような形態を取ったのか、それとも本当に先史時代のクロマニヨン人が描いたのか迷うようなものもたくさん見受けられた。

そんな時、決め手となるのは「色」である。色があること、着色されていること。それはまさしく人類の手になるものであって、決して自然の造作ではない。改めて、人類にとっての「色彩の力」がいかに偉大なものであるかを思い知らされた感があった。

ところで、今回の旅行の喜びの一つにおいしい食事とワインがあった。

このクロマニヨン人の洞窟があるドルトーニュ地方は、フランスでも随一の食事のおいしい地方である。

自然の幸豊かな地方であり、冬の間、洞窟に籠って絵を描いていられる豊かさに満ちている。

特産品としてクルミ、ナッツなどの木の实、蜂蜜、イ

チゴやラズベリー、グズベリーなどの果実、トリュフ、セップなどのキノコ。先史時代の人間は食べていたかは知らないがフォワグワの産地でもある。

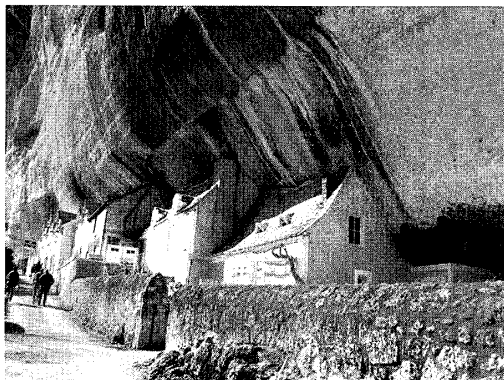
ゆるやかに流れるヴェゼール川にはサケが遡上し、カモ、シカ、イノシシ、ウシなどが狩の獲物となつたであろう。ワインはいうに及ばず、大地を乳と蜂蜜の流れるというべき場所であった。

今回、現地に長く住んでおり、発掘もするロム氏と夫人の小笠原文さんのおかげで、これぞ人類が得た最高の悦楽ともいうべき食にありついた私たちであった。

最後にラスコー洞窟の保存修復を行っているスタジオZKでは、現在ラスコー3を制作中である。これは最新レーザーでラスコー洞窟の凹凸面を計測し、3Dで実物大に立体復元、分析した着色材で精密に壁画を再現している。やがて完成した暁には、立体壁画として世界中を巡り展示されることになっている。修復士のサンソン氏は「日本でもいずれラスコー洞窟の展覧会を開きたい、また、着色材の原料の分析は進んでいるが色彩を測色しているわけではないのでその点も研究を進めていきたい。また、世界中の壁画芸術のアーカイブも作って研究者が相互に研究できるような組織を作りたい」等、熱く語ってくださった。日本色彩学会がその受け皿の一翼を担えれば素晴らしいと感じている。今回の派遣を一つの契機として、世界規模の相互研究の広がりとなれば、色彩学会としても得るところは大きいと思う。そうなることを願ってやまない。

(市原恭代)

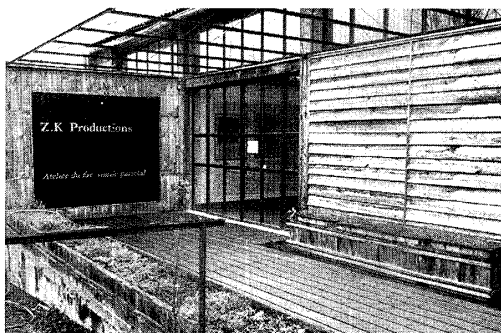
(カラー写真は118ページ)



現代も使われている洞窟



ミシュラン1つ星レストラン ヴューロジにて
昼のコース(正直に言って絶品です)



保存修復アトリエ ZK(ズィーカー)



自作(!)の毛皮と帽子を被らせて頂いた福本さんロム氏は針も石器で自作し動物の筋膜を裂いた糸で毛皮を縫い合わせている。この後、弓矢をより遠くに的確に飛ばす方法もご教授頂いた。

先史時代壁画芸術とその色について オジョラ博士の講演報告

ラスコー洞窟の壁画は、17000年前の旧石器時代後期のクロマニヨン人によって描かれていた多色塗りの洞窟壁画である。1940年に発見されてから、かつては大勢の見学者を受け入れていたが、観客の吐く二酸化炭素によるカビなど深刻な被害が発生したため、1963年以降から洞窟は一般公開されていない。

そのため、残念ながらラスコー洞窟自体に入ることとはできないのだが、忠実に再現されたラスコーⅡ見学と先史時代壁画研究の第一人者であるオジョラ博士にお話を伺うことが出来た。日本色彩学会からの訪問ということで特別に「先史時代壁画芸術とその色について」という大変興味深い講演頂いた内容をご紹介します。

(オジョラ博士の講演)

先史時代芸術といわれる洞窟壁画はヨーロッパを中心に約320存在している。洞窟壁画描かれた題材は、馬が一番多く、続いてビゾン(野牛)、オーロック(牛)、マンモス、サイ、ヒョウ、クマのような大動物、さらにトリとアヒル、フクロウ、キューサック、魚、模様、そして少数であるが人間も描かれている。洞窟壁画の最も素晴らしい点は、非常に限られた道具と顔料で表現されている所である。彼らが使ったのは線を刻む石器、4～5種類の顔料、そして絵の具を塗るための簡易な筆や道具のみである。彼らはどのよう

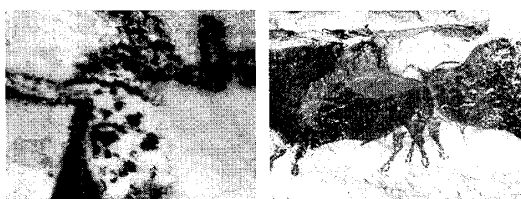


図1 (左)スタンプを使って点描で着色された馬[1]

図2 (右)動きを表現するため、奥の足はつながっていない[1]



図3 5匹の鹿。遠くの鹿は薄く簡単に、近くの鹿は濃く詳細に強く描かれている[1]

洞窟壁画を描いたかのだろうか。

岩に刻まれた輪郭は、描き直しがみられるのは2点ほどで、ほぼ迷いない大胆な線で描かれている。

色彩は赤(酸化鉄)、黄色(黄土)、黒(2酸化マンガ、炭)、紫(二酸化マンガンを加熱)の4色を用いて、水で溶いて混色はせず、胴体を2色で描いたり(図2)、一部塗り残したりと、独特な色彩感覚で力強い表現がされている。着色には筆を用いたり、顔料を口に含んでスプレーをしたり、スタンプを使って、点描のように描いたり(図1)と様々な工夫をこらしている。壁や天井一杯に躍動感に溢れる構図で描かれ、一部はシンメトリーを用いている(そのため「旧石器時代のシスティナ礼拝堂」呼ばれることもある)。

現代でいう点描技法(図1)、遠近法(図3)などの表現技術が使われており、1950年代にラスコー洞窟を見学した西洋絵画の巨匠、パブロ・ピカソが「彼らは美術をやりつくしてしまった」と言ったという。

洞窟壁画の研究成果により、どこで、どの技術、どの材料を使って、いつ描かれたかほぼ正確に知ることができるようになったが「何故、何のために描かれたのか?」だけは決して知ることができない。

しかし、洞窟壁画の中で唯一、解釈ができる絵がこの絵である(図4)。この絵はビゾン(野牛)に矢がささっており、人間によって傷つけられたビゾンが鳥頭の人間に向かってきている様子である。「鳥頭」というのが象徴的で「死にゆく人の魂を天に昇らせている鎮魂の様子を描かれたのでは」といわれている。

(福本麻子)

(カラー写真は118ページ)



図4 鳥頭人間とビゾン。鎮魂の絵といわれる

参考文献 [1] Norbert Aujoulat : Lascaux : Movement, Space, And Time, seuil, 2004.



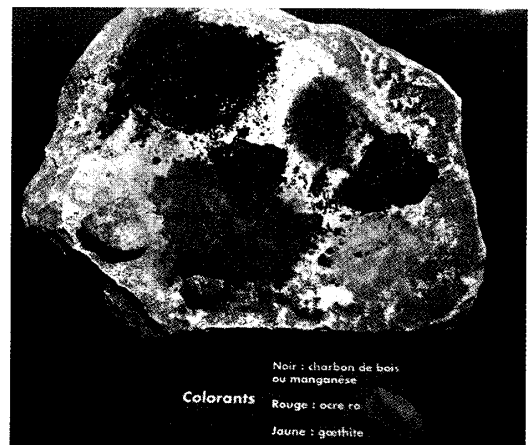
ウシの線描



ラスコー洞窟の彩色画



迫力ある連続した動物の描写



クロマニヨン人の使った絵の具

赤 - 酸化鉄 黄 - 黄土 黒 - 二酸化マンガ 中央の黒い塊は木炭

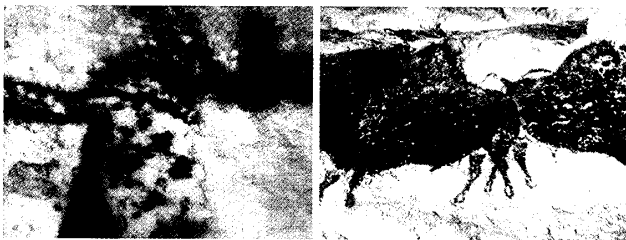


図1 (左)スタンプを使って点描で着色された馬[1]

図2 (右)動きを表現するため、奥の足はつながっていない[1]



図3 5匹の鹿.遠くの鹿は薄く簡単に、近くの鹿は濃く詳細に強く描かれている[1]



図4 鳥頭人間とビゾン.鎮魂の絵といわれる

参考文献 [1]Norbert Aujoulat : Lascaux : Movement, Space, And Time, seuil, 2004.